

本の学界は、第二次世界大戦の敗北に伴う大日本帝国の崩壊に直面し、日本がそもそも「近代化」できていたのか、という自己批判を始める。新たな世界、新たな理想、新たな近代——それまでの様々な思想分野は大きく変化することとなり、「日本仏教」も無論そのひとつであった。「戦後」の体制において研究活動を開始した研究者たちは、どのような「日本仏教」を描こうと試み、またそこにはどのような苦悩と期待があったのか。こうした問題を説明すべく、我々は『戦後歴史学と日本仏教』(仮題)という論文集の企画を始めた。これは一九四〇年代後半より一九七〇年代初頭にかけて展開された日本仏教研究について、その主要な担い手たちにおける行動と思想を踏まえ、これを再考しようとするもので、本パネルセッションはその事業の一環としてもたれたものである。

連続と断絶——服部之総の「親鸞」——

桐原 健真

多くの唯物史観論者がそうであったように、服部之総(一九〇一—一九五六)もまた宗教に対して厳しい態度を取る人物であった。しかし「宗教は民衆の阿片」というテーゼは、必ずしも彼にとって絶対的ではなかった。宗教もマルクス主義もともに人類平等の状態という理想を求める点では同じであり、その理想の実現する場所を彼岸におくか、此岸におくかの違いでしかないと考えていた彼は、宗教が人類史上に果たした役割を全面的に否定することはなかった。そしてこの前提に立つことで、彼は、ある歴史的・政治的状况の下で、「マルキシズム」

と「宗教」による「共同戦線」の可能性を肯定したのである。

こうした宗教論を積極的に展開していた一九三〇年前後の服部は、『唯物史観と現代の意識』(一九二八)を著した三木清との論争のさなかにあった。宗教の不滅性や「宗教の本質」論を説く三木に対し、その同じ左派陣営に属するはずの服部が強い反駁を与えたのである。

しかしこの論争は意外なところで結末を迎える。一九三〇年五月に日本共産党への資金援助を理由に逮捕された三木の不在という状況下で、ロシア系マルクス主義研究で知られる川内唯彦が、「マルクス主義者は宗教に如何なる態度をとるのか——三木氏と服部氏の所論に就いて」を著し、プロレタリア科学研究所から三木を排除するとともに、服部の戦術的な共同戦線論をも僧侶主義的であると批判したのである。この「肅正」の結果、服部は論争のみならず宗教全般に対して沈黙するに至ったのであり、それは敗戦まで続いた。

この服部の沈黙は、敗戦後破れることとなる。すなわち彼は、宗教とりわけその出自たる浄土真宗に関して積極的に発言するようになったのである。この変化をもたらしたのが、ともに論争からの退場宣告を受けた三木の「親鸞」(一九四五)であった。三木の「親鸞」は、服部が「大寺の長男」という「業」から脱すること一度は捨て去ったはずの親鸞へと回帰させるものであった。しかもそれはたんに「科学的」な「歴史学者」による「親鸞の社会史的解明」ではなく、「親鸞に関する本願寺的な神話にたいする戦であり、怒り」であって、まさに「生得の因縁」だったのである(服部「親鸞ノート」二版序文)一九

五〇）。

服部が三木の親鸞論を高く評価した最大の理由は、三木が親鸞を従来の「護国思想家」から解放し、「人間」として描き出したという点にある。「王法為本」「仁義為先」などというのは、蓮如の作文であって、親鸞においてはまったく見出されない——このように親鸞を脱護国化する三木の試みは、服部にとって、「宗祖」を護国思想家として喧伝してきた蓮如以来の真宗教団から親鸞を決別させるものとして理解された。三木が哲学的に探求した親鸞思想を、服部は歴史学的に証明しようとしたのである。

親鸞から神話性を剥ぎ取り、これを真宗教団から分離させる——それは、「農民と女性」（服部「三木清と「親鸞」」一九四七）とともにあった人間親鸞の復活であり、畢竟堂班制度を始めとする募財活動に困しむ農民を教団から解放することであると服部は考えた。血脈相承の法主制を否定した彼は、無教団派親鸞主義とでも言うべき結論に到達したのである。それは教団教義に左右されない自由な親鸞論を語る場を提供するものでもあった。

戦後の親鸞研究における「〈農民〉とともにある〈反権力〉の親鸞」というイメージは、服部が、その因縁浅からぬ三木清によってルールが引かれた親鸞の「脱護国化」とともに、「本願寺教団の民主化」（一九四八）の理論的基礎となる親鸞の「脱教団化」という営為を通して形作られたものであった。それはまさに服部における「生得の因縁」の成せる業であったと言える。

圭室諦成著『葬式仏教』再考

ライアン・ワールド

いつから、誰の提言によって「葬式仏教」という表現が流行り出したかは不明であるが、少なくとも一九六三年に曹洞宗の圭室諦成（一九〇二—一九六六。当時は明治大学文学部教授）が著した『葬式仏教』（大法輪閣出版）によって、その名は巷間に知られるようになった。今日、この表現は葬式・葬儀に「安住」するとされる伝統仏教教団（こう断言することは妥当かどうかという問題は別として）を批判する際、よく使われることは周知の通りである。

しかし、圭室の『葬式仏教』や、またこれに関連する彼の他の論文などをひもとくと、ことはそう簡単ではないことがわかる。むしろ、圭室が提供した「葬式仏教」論は、ある意味では葬式・葬儀を肯定しているふしすらうかがわれる。一例をあげるとしたら、次の文章はそのことをよく表していると思う。

維新以後の仏教の活きる路は、葬祭一本しか残されていない。そして現在当面している課題は、古代的・封建的な、祝術的・祖先崇拜的葬祭を精算して、近代的な、弔慰的・追悼的な葬祭儀礼を創造することである。仏教者は、この現実眼をつぶって、いたずらに幻想の世界を彷徨している。

（二一〇頁）

つまり、現在、日本仏教教団の「活きる路」は葬祭のみにあるが、伝統的な葬儀行事をそのまま持続することはもはや時代錯誤ということなのである。そして、これに代わって伝統仏教教団が「近代的な葬祭儀礼」に切り替える必要性を、圭室は主